

## 世にあつて、世と分かれた

### 世に仕える

(ヨハネ一七・六〜一九)

日本に「祈り」が復権したのは何時のころからだろう。科学万能の時代には非科学的、迷信的ということでは社会の片隅に追いやられていた祈りが今や巷に氾濫している。果ては就活生の非採用通知にまで祈りがあふれている始末。もっともこの種の祈りには不快感を抱く人も多く、中には内定を辞退した学生の方が意欲返しならぬ「お祈り返し」をするなどといったこともあったとか。言葉こそ復権しているもののそれらは真の祈りとは到底言えないと言わざるを得ない。

閑話休題。生涯を通じてイエスは祈りの人であつたが、本章のよく大祭司の祈りと呼ばれる祈りはその白眉である。今朝はその中の弟子たちへのとりなしの祈りから、私たち主の弟子たちに対するイエスの願いを探りたい。

#### 一、世にあり続ける

前日も語つたことだが、イエスは自ら去つていくことを弟子たちにと

つての益だと語り、彼らにご自身の代わりのもう一人の助け主である聖霊を遣わしてくださることを約束された(ヨハネ一六・七)。つまりは準備万端である。だがイエスはそこで「細工は流々、あとは仕上げを御覧じろ」と威勢よく啖呵を切ることはしなかつた。むしろ弟子たちが直面するであろう「患難」を覚え、世に跋扈する悪い者から守られるように祈つてくださったのである。興味深いのはイエスが漠然とした「悪」からの守りを祈つたのではなく「悪い者」、即ちサタンの方の手からの守りを祈つてのことだ。この世での悩みの中で、サタンにつけ入れられて信仰を失うのではなく、逆にその中で力づけられ、世に居続けられるよう主は祈られたのである。

#### 二、世と分かれた

イエスの弟子たちに対する第二の祈りは弟子たちが真理によって聖め別たれることであつた。主の弟子たちは世に居続けなければならぬ。軽々な退却はみ心では決してない。しかし何であれ世の中におればそれでよいというものでもない。イエス自身が世の中に居ながら、世の中の悪と分かれた神の聖さを保ち続けたように、主はその弟子たちが神のみことばの真理によって世と分かれたることを願われてい

る。少しは良くなつてきたとはいへ、日本にはよく言えば「和をもつて尊し」、悪く言えば同調圧力の強い文化風土がある。この中で主の弟子としての「違い」を明瞭にすることは容易なことではない。そのような状況をイエスはよくご存じて御父に向い、とりなしの祈りを捧げられた。この祈りは私たちへの愛の奉仕そのものなのだ。

#### 三、世に仕える

キリスト者は世と隔たり、聖さを保つて世に居続けなければならない。こういつと何か教会という聖域の中に逃げ込み、ひっそりと信仰を保つ内向きなイメージが頭に去来するかもしれないが、それはイエスの意図とは全く異なる。その証拠にイエスは聖め別たれたご自身の弟子たちを世に遣わし、世の人のなかから信じる者を起こして皆が一つになるように祈つておられる(一八、二一節)。イエスは世の光である。主の弟子たちもまたそうだった。対して世は暗闇である。光は光のままに居なければ意味をなさない。火の消えた蠟燭は闇と同化して用無しだ。だからこそキリスト者はその違いをもつて世に仕えねばならない。光を守るために外に出ないとするばそれはまさに本末転倒であり、主の負託に応えることにはならない。ローザンヌ誓約の中に「われわれは教会のゲッター化

から抜け出て未信者の社会の中に充満していく必要がある」とあるが、それはまさにこの大祭司の祈りに基礎を置くものなのである。

\* \* \*

ハーバード卒のアジア系アメリカ人の彼は一夜にしてアメリカンドリームの実現者になつた。「Linsanity(狂気のリン)」のあだ名とともに。だがそれからが大変だった。名誉と富と引き換えに湧き起こる容赦ない批判と中傷の雨。移籍先ではチームの戦略に合わず思うような活躍が出来なかつた彼は文字通りメディアの餌食に。「高い買い物だ」「失敗だ」と書き立てられた。観客にとつては「一夜の夢」もまた良しだが、当人とつては地獄の責め苦であつたらう。だがこの患難と失意の只中でクリスチャンの彼は優先順位をもう一度神に置きなおした。そして今では「謙虚さを失わずひたむきに自らの課題と向き合う誠実さを持つ」と評される好選手になつた。何より素晴らしいのは彼がこの体験を素直に語り、キリストの光を輝かせ、多くの人を救いに導いていることだ。友よ、イエスはすべての信徒のためにとりなしておられる。私たちも世にあつて、世と分かれたる、世に仕えようではないか。